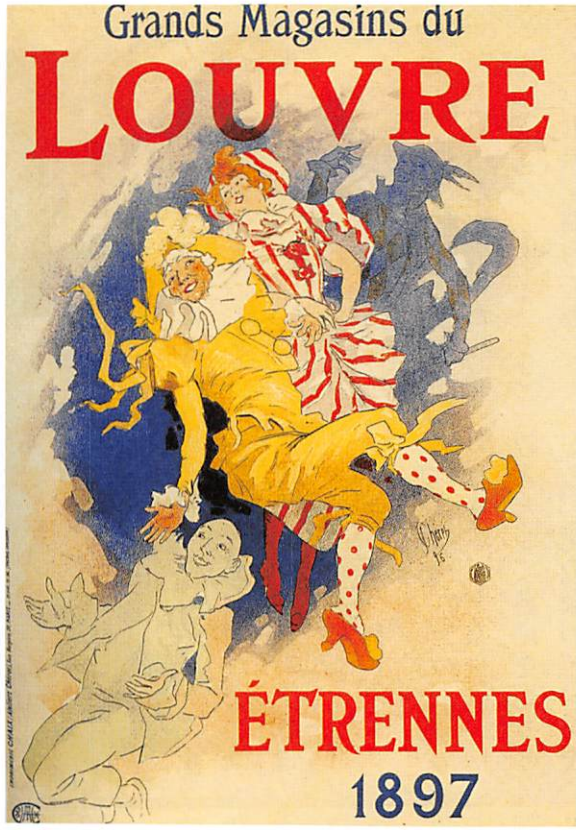
会報

第54号
平成21年3月

アルテピア

社団法人 北海道美術館協力会
札幌市中央区北2条西17丁目　TEL・FAX 011－644－4025



ジュール・シェレ　《ルーヴル百貨店―1897年新春大売出し》

1896年　リトグラフ・紙　119.5cm×82.0cm　〈北海道立帯広美術館蔵〉

19世紀末から20世紀初頭にかけてパリを中心に大きく花開いたポスター芸術。この時代、さまざまな商品や催し物を宣伝する大判多色刷りの石版画ポスターが華やかに街頭を飾った。ジュール・シェレは、明るく軽やかな筆致で人気を博し、こうしたポスターを1,400点以上残した。

パレ・ロワイヤル広場に店をかまえる「ルーヴル百貨店」は、今でこそ「ルーヴル・アンティーク」と名前を改め、ギャラリー・ショップに様変わりしたものの、季節ごとの売り出しや、クリスマスと新年の催しなど、定期的に広告ポスターを掲げる老舗であった。「ポスターの父」と呼ばれたシェレも、この百貨店のために数多くのポスターを制作した。賑やかな売り出しの呼び声と新年を迎える明るい笑い声にあふれたこのポスターは、シェレが頻繁に描いたピエロやアルルカン、ポリシネルといった道化、そして、なんといっても圧倒的な頻度で表れる女性の姿が登場する。シェレは4枚の石版を使って赤、黄、青、黒の基本色を刷り重ね、鮮麗な色彩のコントラストを生み出すと同時に、中央の人物を際だたせるために、画面下のピエロや右上の仮面姿のアルルカンを背景の影のように塗りつぶした。また、対角線上に傾いた構図によって、軽快に中空を舞うポリシネルや縞模様の衣装を着た女性を陽気で屈託のない笑いの中に描いている。

こうした道化や女性たちが登場するシェレのポスターには、例外なく笑いがあふれている。道化たちの悪戯な笑い、意地悪な笑い、女性の媚態に満ちた妖しげな笑い、優しさあふれる笑いなど…。シェレのポスターは、それらのさまざまな笑いとともに流麗で活気に満ちたものとなり、大衆の心をつかんだ。

「ポスター＆ポスター」（平成21年4月10日～5月6日）では、この秀作を含み、多彩なポスターを紹介する。

（北海道立帯広美術館主任学芸員　平　利弘）

神仏大習合！ 牧島如鳩展

～耶蘇（やそ）も仏陀（ブッダ）も救世主（メシア）なり～

北海道立函館美術館　主任学芸員　大下　智一

（図1）《ゲフシマニヤの祈り》　1934（昭和9）年
金成ハリストス正教会蔵

「御仏も信ぜば神も一つなり　耶蘇も仏陀も救世主なり」

日本ハリストス正教会の伝道者にしてイコン画家、さらには仏教にも造詣が深く、仏画も描いた牧島如鳩（にょきゅう）（1892～1975）。その世界を端的に表しているのが、この自作の歌ではないでしょうか。

如鳩は本名を省三といい、現在の栃木県足利市に生まれました。父、百祿は田崎早雲に師事し、閑雲と号した南画家でした。

如鳩は、ハリストス正教の信者であった父の勧めにより、正教神学校に入ります。そこで、山下りんの手ほどきを受け、イコン画を学んだと考えられます。卒業後は、伝教者として各地を巡りながら、正教会のイコンを描き、さらには公募展などに仏画などを出品、宗教、聖俗の垣根を超えた活動を見せました。

そして、いつしかその表現する宗教世界は、洋の東西を超えて独自の宗教観を形成しつつ、展開していったのです。そこには、キリスト教と仏教が「習合」した特異な宗教観に支えられた、独自な世界が広がっています。

ここでは、そうした牧島如鳩の作品世界を、いくつかの作品によってご紹介します。

《ゲフシマニヤの祈り》（図1）は、1934（昭和9）年に新築された金成ハリストス正教会のために描かれました。基となった図柄は、19世紀のロシアで有名だったブルーニという画家の作品です。如鳩にイコン画を教えたと考えられる山下りんも同じ図柄のイコンを描いています。このイコンは、当時のハリストス正教会の典型的な描法によって描かれているものです。

《魚籃観音図》（図2）は、戦後、弟子を頼りに福島県小名浜町（現・福島県いわき市小名浜）に移り住んだときに、小名浜漁港の大量を祈願して制作したものです。鰯の稚魚が入った瑠璃の器を

（図2）《魚籃観音図》　1952（昭和27）年　小名浜漁業協同組合蔵

（図3）《横たわるイエス（「空」のなかのイエス）》　1959（昭和34）年頃

（図4）《大自在千手観世音菩薩》　1964（昭和39）年　願行寺蔵

（図5）《千手千眼マリア》　1960年代

《横たわるイエス（「空」のなかのイエス）》（図3）も、とても興味ぶかい作品です。横たわるイエスという、キリスト教でも伝統的なモチーフを描いていますが、よくみると天蓋や天使の羽、寝台などが組み合わさって、「空」という文字を形作っています。晩年の如鳩は、お寺に庵を結ぶなど、仏教の世界に傾倒していきました。この作品には、キリスト教と仏教の死生観が一つに重ねられたような、如鳩独自の宗教観が現れているといえるでしょう。

ほかにも、仏像、聖堂など、仏教、キリスト教それぞれを象徴するものを手にした《大自在千手観世音菩薩》（図4）や、額に「第三の眼」を、またあまたの手にも「眼」を持った《千手千眼マリア》（図5）など、独自の「神仏習合」をみせる作品群からは、一度見たら忘れられないほどの深い印象を与えられます。

本展では、牧島如鳩の紡ぎ出した、洋の東西を超えた「祈りのかたち」を、約120点の作品により紹介します。如鳩は生前、口癖のように「500年後の人に自作を見せたい」と語っていたといいます。まだ没後30余年ですが、この機会にぜひとも、深い信仰心に支えられた世界に触れてみてください。

道立函館美術館では5月30日（土）から7月12日（日）まで、「牧島如鳩」展を開催します。

近代美術館

没後80年記念　佐伯祐三展
―パリに生き、パリに逝った画家の熱情―

四月二四日(金)～六月一四日(日)

その作品《郵便配達夫》などで知られる佐伯祐三の名は、どなたも一度は見聞きされているでしょう。その画業を振り返る、北海道では初めての、本格的な回顧展を開催いたします。

佐伯祐三がパリで没してから八〇年。パリの街頭を重厚な色彩と激しい筆致で表現し、情熱のなかに郷愁をも感じさせる作品は、今なお人々を魅了します。

佐伯は一八九八年大阪に生まれ、一三年に東京美術学校を卒業、その翌年パリに旅立ちます。この年、里見勝蔵とともに自作を携えフォーヴィスムの巨匠ヴラマンクを訪ね、「このアカデミック！」と怒声を浴びた体験が、大きく表現を変化させ、その後、さらにユトリロの影響を受けつつ独自の画風を確立していくのです。二六年、一時帰国して里見や前田寛治らと「一九三〇年協会」を結成するも、パリへの想いは断ちがたく、翌年再びパリに渡ります。この滞在において、広告の文字や並木がパリの街頭風景に躍る、佐伯ならではの表現が開花しますが、翌二八年、三〇年という短くも情熱を燃やし続けた生涯を終えます。

この展覧会では、そうした佐伯が命をカンヴァスに刻むかのように描いた創造の軌跡を約一〇点によって辿り、また佐伯芸術の成立にかかわった画家や、後進の画家らの関連作品約二〇点もあわせて紹介し、佐伯芸術の本質と拡がりを探ります。熱気にあふれた会場となることでしょう。どうぞお楽しみに。

《カフェ・レストラン》　1928年
大阪市立近代美術館建設準備室蔵

三岸好太郎美術館

日本近代洋画と三岸好太郎　Part1

九月一二日(土)～一〇月二五日(日)

北海道出身の美術史家・匠秀夫は、神奈川県立近代美術館長や茨城県立近代美術館長を務め、数々の展覧会に携わりながら日本近代美術についての多くの著作を手がけてきた。同郷の画家・三岸好太郎に深い関心を持ち、詳細な調査の末一九六八年、『三岸好太郎―昭和洋画史への序章』（北海道立美術館発行、一九九二年に求龍堂より改訂新版）を刊行。この画家の作品誕生の背景や豊富なエピソードに彩られた生涯を、余すところ無く語った三岸好太郎研究の決定版となった。同書はさらに幅広い視点から、同時代の画壇の動きや、社会的状況までも、生き生きと照らし出している。

展覧会ではこの著作をベースとして、三岸の画業とともに、近代日本美術の巨匠達の作品を含む彼に影響を与えた様々な画家や美術の潮流を紹介し、日本近代美術のダイナミックな動きの中に三岸の魅力を再発見します。

《檸檬持てる少女》
1923年　三岸好太郎美術館蔵

旭川美術館

あべ弘士　動物交響楽
―交差するいのちの詩（うた）―

七月一八日(土)～一〇月四日(日)

あべ弘士（一九四八生）は旭川を拠点に、全国的に活躍している絵本作家です。旭山動物園で飼育係を務めながら絵を描いたこと、また、TV放映された『あらしのよるに』シリーズ（木村裕一・作、あべ弘士・絵、講談社）などの作品をご存じの方も多いでしょう。

本展では、絵本原画や新作の立体作品による展示と、絵本をめぐるトークやワークショップ等の事業を通して、あべ弘士の創作活動を総合的に紹介します。地上に生きるものたちが種の違いを超えて出会い、いのちといのちを響かせ合うような、深くあたたかな生命観に満ちたその表現世界を、子どもたちはもとより多くの人々に楽しんでいただきたいと願っています。

《『エゾオオカミ物語』絵本原画》
2008年　北海道立旭川美術館蔵

函館美術館

《開港150年記念》箱館→函館ビジュアル時間旅行

七月一八日(土)～九月六日(日)

一八五九年の函館（箱館）開港から一五〇年。江戸末期から明治維新にかけての激動の時代、そして文明開化を経ての函館の文化の発展と興隆は、この地の営みのなかで、さまざまなかたちとしてあらわれ、街の装いもハイカラからモダン、そして現代へと多様に変化しています。本展では、幕末から現代にかけての函館をめぐるさまざまなイメージを、絵画、彫刻、錦絵、ポスター、写真、印刷、広告、看板、建築等、多様な分野の美術作品やビジュアルな資料を通して紹介し、函館の歴史・美術文化の再発見や懐かしの光景、驚きのイメージなどを多彩に展覧して、見ておもしろく、感じてたのしい、愉快な時間旅行へ誘います。

《金森洋物店開店広告》
函館市中央図書館蔵

帯広美術館

北海道立近代美術館所蔵 高橋博信浮世絵コレクション
(Ⅰ部)ぶらり江戸めぐり ～歌川国貞「百人美女」の世界～
五月一五日(金)～六月七日(日)
(Ⅱ部)浮世風俗 ～美人画の三絵師 国貞、国芳、英泉～
六月一三日(土)～七月五日(日)

江戸時代の町人に愛された浮世絵。浮世絵は、遊女をはじめ様々な階層の女性を活写し、多彩色の木版画によって広く世間に流布しました。

本展覧会では、帯広市で長年にわたり浮世絵を収集した故・高橋博信氏のコレクションが里帰りし、歌川国貞、歌川国芳、溪斎英泉による、江戸末期の浮世絵の世界を紹介します。

Ⅰ部は、歌川国貞の揃物「江戸名所百人美女」全一〇〇点が並ぶ希少な機会とし、「百人美女」を中心に江戸の名所をめぐります。浅草、吉原、木場、日本橋などなど。時代劇でおなじみの土地が、浮世絵の中に登場します。

Ⅱ部では、国貞、国芳、英泉の三人の美人画により、遊里や庶民の生活に迫ります。現在では見られなくなった道具や習慣、流行など、当時の風俗をご覧ください。

歌川国貞 《江戸名所百人美女 霞ヶ関》
1857年 北海道立近代美術館蔵

釧路芸術館

「マイケル・ケンナ写真展」
八月二九日(土)～一一月一一日(水)

広漠とした雪原に凍える一本の木、水平線の彼方にまで広がる氷雪、寒々とした湖に突き出す朽ちた桟橋。マイケル・ケンナの作品は多くを語りません。白と黒が織りなすモノクロームの世界の中で、汚れのない純化された自然は寡黙に、抒情的に、神秘的に表現され、それでいて揺るぎない存在感をにじませているのです。

マイケル・ケンナは、一九五三年、ランカスターに生まれ、ロンドンの芸術学校で学び、一九七七年以降はアメリカを拠点として国際的に活動する風景写真の第一人者です。近年は日本各地、とりわけ北海道を毎年のように訪れ、北国の凍てつくような自然を撮り続けています。

個展や写真集「Japan」「Hokkaido」などを通し、マイケル・ケンナの評価は日本でもますます高まっています。本展は、初期作品から日本、そして北海道にいたるその斬新なイメージに満ちた世界を、約一四〇点のモノクロ作品で紹介するものです。

《和琴》 2002年

札幌芸術の森美術館

絵画と写真の交差 印象派誕生の軌跡
四月四日(土)～五月二四日(日)

写真は「現在」をほぼ瞬間的に活写します。その写真術が誕生したのは、一九世紀半ばのことです。当時、リアリティを追求してきた画家たちにとって、それは脅威なものでした。画家から写真家に転身した者も数多く現れました。アングルは写真禁止令の発布を政府に訴えたほどです。しかし、何千年と描かれてきた絵画の地盤はそうたやすくは揺るぎません。人間の網膜にしかとらえられない物があります。脳によって補正される現実もあります。そして、絵画は絵画にしかなしえない表現を獲得しようと動き出しました。事物ではなく、人の目がとらえる光や闇、それによって変化する色――新たな芸術運動、印象派の登場です。

もちろん、写真もその優れた記録性だけに甘んじていたわけではありません。その進歩を緩めることなく芸術の領域に割り入ろうと高みを求め、写真独自の展開を見せていきます。

本展は、絵画と写真が幾重にも交差し、相克し、次々と見せた劇的な展開を多角的に解き明かす展覧会です。

クロード・モネ《睡蓮》 1908年
東京富士美術館蔵

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌第二中学の絆 ―本郷新・山内壮夫・佐藤忠良・本田明二―
四月二五日(土)～六月二八日(日)

一九七一年、札幌オリンピック記念として札幌市真駒内五輪橋に本郷新・山内壮夫・佐藤忠良・本田明二の四人の彫刻家が作品を制作設置しました。偶然なのでしょうか。四人は、北海道札幌西高等学校の前身旧制第二中学の先輩後輩でした。

北海道を代表する彫刻家四人が同窓生という偶然は、興味深いことです。卒業後の四人を結びつけたのは、公募団体新制作協会でした。本郷・山内・佐藤は創立会員、本田は戦後に会員となりました。会場で出会った時に二中の同窓であったことは、より親しい感情があっても不思議ではありません。小学校からの幼馴染でもある二歳違いの本郷と山内は、とくに親しい関係でした。

四人は、生涯にわたり深い親交を持ち、終戦後の困難な時代に助け合いながら彫刻家として独自の世界を展開しました。

本展では、札幌二中出身の彫刻家四人を紹介します。

本郷新
《若き日の佐藤忠良氏》 1948年

MUSEUM CALENDAR
2009.4～2009.10

美術館の特別展覧会ご案内

	4	5	6	7	8	9	10
近代美術館	～4/12 セザンヌ主義展	4/24～6/14 没後80年記念 佐伯　祐三展 ーパリに生き、パリに逝った画家の熱情ー	6/19～6/30 北海道書道展第50回記念展 北のかがやき2009	7/11～8/23 聖地チベット ポタラ宮殿と天空の至宝		9/2～9/13 版・絵画と創作 北海道版画協会50周年記念展	9/19～10/18 北の光をうたう 中野北溟の世界
三岸好太郎美術館	4/1～6/14 所蔵品展（第1期） 音楽のある美術館		6/19～9/6 所蔵品展（第2期） 31才ー駆けぬけた生涯				9/12～10/25 特別展 日本近代洋画と三岸 好太郎Part1
旭川美術館	～4/12 一ノ戸ヨシノリ展	4/18～5/24 アートを楽しむ ギャラリー・ゲーム	5/30～7/12 山寺 後藤美術館所蔵 ヨーロッパ絵画の輝き ～ロココの華・バルビゾンの田園～	7/18～10/4 あべ 弘士 動物交響楽 ー交差するいのちの詩（うた）ー			10/10～10/18 第5回現代の書ー北の群像ー展
函館美術館	4/4～5/24 山寺 後藤美術館所蔵 ヨーロッパ絵画の輝き ～ロココの華・バルビゾンの田園～		5/30～7/12 《神仏大習合！》 牧島如鳩展 ～耶蘇（やそ）も仏陀（ブッダ）も救世主（メシア）なり～	7/18～9/6 《開港150年記念》 箱館→函館ビジュアル時間旅行		9/12～10/4 ニューフェイス あきのかおみせ 新収蔵秋顔見世	10/11～11/29 《函館開港150年記念》 開港地をうたう
帯広美術館		4/10～5/6 ポスター＆ポスター ロートレック、ミュシャから現代グラフィックまで	5/15～7/5 高橋博信浮世絵コレクション Ⅰ部（5/15～6/7） ぶらり江戸めぐり～歌川国貞「百人美女」の世界～ Ⅱ部（6/13～7/5） 浮世風俗～美人画の三絵師 国貞、国芳、英泉～	7/14～9/9 没後50年 北大路魯山人展			9/18～11/11 アイヌの美 ーカムイと創造する世界ー
釧路芸術館		4/18～6/7 日本画名品100選 遠き道、はて無き精進の道程	6/20～8/16 版画に見る印象派 ー陽のあたる午後、天使の指がそっとー			8/29～11/11 マイケル・ケンナ写真展	
札幌芸術の森美術館	4/4～5/24 絵画と写真の交差 印象派誕生の軌跡		5/31～7/1 渡会純价の世界 心のリズム 奏でるメモワール	7/11～9/6 クリムト、シーレ ウィーン世紀末展		9/12～9/27 土と炎の饗宴	10/3～11/23 山本正道展
本郷新記念札幌彫刻美術館		4/25～6/28 札幌第二中学の絆 ー本郷新・山内壮夫・佐藤忠良・本田明二ー		7/4～8/30 独創性への道標 ーロダン・高村 光太郎・本郷 新ー		9/5～10/25 第14回 本郷新受賞記念彫刻展	

4月24日（金）　道立近代美術館のレストランが変わります！

メニューが一新、北海道の食材をふんだんに使った
優しいメニューで皆様をお待ちしております。

営業時間　**10:30～16:30**（ラストオーダー／食事は15:30まで、飲み物は16:00まで）

・6月～9月の営業時間　10:00～17:00
・夜間開館日の営業時間　10:00～19:00

お問い合わせはレストラン「ぼーさーる」☎011-643-0208へどうぞ

「雪中の狩人」
―ブリューゲルの絵の前で―

鹿内　正一

中野孝次の「ブリューゲルへの旅」を読んだのは四〇年も前のことだが、その中でブリューゲルの「雪中の狩人」という絵を知った。著者がウィーン留学中に美術史美術館に通い魅せられたというこの絵は、厳しい冬、疲れた猟師が乏しい獲物を背に猟犬とともに村に帰ってくる。枯れ木が雪の中にそびえ、カラスが舞っている荒涼とした世界。白と褐色、濃緑のこの絵に、暗い雪国の人の営みが重く描かれ、著者同様私もこの絵に感銘を受けた。

さて、いつかはこの絵の実物に接したいと考えていたが、それが実現したのは二〇〇六年秋ウィーンに行ったとき、念願の美術史美術館を訪れ、この作品の前に立つことができた。古い荘厳な美術館の一角でこの絵に対面した時、足が震える思いがした。やはり実物はインパクトが違う。

まじかに見るこの絵はまた一段と心にしみるものがあり、しばし時間を忘れたのである。

受賞にあたって

岩内高校三年
向井かおり

私は、芸術家のなりたがりです。というわりにはピアノと油彩だけです。いつかは芸術全般に触れてみたいと考えています。なぜかといいますと、各々が各々に良い影響をもたらすからです。

「この『I鉄工にて、鉄光』の光の置き方には、音楽のリズムを感じる」。

ある審査員の方がそうおっしゃいました。進路の話になり、音楽を志している事を私が言うと、そうおっしゃったのです。何となく自覚はありました。絵の搬入とピアノのほうが重なると、二つとも死にもの狂いで取り組み、結果、二つともうまくいくのです。気合い、気迫が伝わるのかもしれません。創作活動に必要な要素だと私は思います。

私は美術も音楽も好きです。進路は音楽ですが、美術も私の要素です。続けないことはないでしょう。もし私の作品（音楽でも美術でも）にあうことがあれば、どうぞよろしく。

この度は誠にありがとうございました。

第50回学生美術全道展
第50回展記念賞・北海道美術館協力会賞
『I鉄工にて、鉄光』

新会員紹介　2008年8月～2009年2月（敬称略）

ご入会ありがとうございました

8月

札幌市	古川　滋郎
〃	山本　智子
〃	中村　康江
〃	中越　希
〃	村上　龍子
〃	久保　佳代
〃	新岡　繭子
〃	松本　道博
〃	多田　六津枝
〃	大島　和子
〃	北越　優子
〃	岸浪　優子
〃	山崎　賢司
〃	山崎　凉子
〃	今井　眞弓
〃	工藤　敦子
〃	藤井　静枝
〃	齊藤　由以奈
小樽市	辻田　早苗
〃	城戸　登志恵
美深町	池上　太郎
〃	池上　祐紀子
北広島市	高畠　由香

9月

札幌市	山田　綾子
〃	遠藤　眞智子
〃	岡本　育子
〃	宮永　和典
〃	前田　幸子
〃	小西　弘子
〃	渡辺　共子
〃	舟木　良晴
〃	堀澤　くるみ
恵庭市	浅田　良子
苫小牧市	星野　喜代子
室蘭市	滝口　信喜
千歳市	泉沢　麻由子

10月

札幌市	太田　弘師
〃	南　トメ子
〃	野澤　修三
〃	佐藤　レナ
〃	難波　康之新
〃	馬場　むつみ
〃	川島　真紀
〃	鹿内　正一
札幌市	岩田　徳子
岩見沢市	関根　恵美子
北広島市	杉山　美智恵
旭川市	高野　ひろみ

11月

札幌市	鈴木　清
〃	松田　祐子
〃	藤田　圭子
〃	細川　道子
〃	宮武　治郎
〃	倉岡　繁子
〃	加藤　直子
長沼町	伝庄　こずえ

12月

札幌市	赤石　準一
〃	田中　茉莉子
〃	岩崎　眞幸美

1月

札幌市	広田　まゆみ
〃	永井　真
〃	永井　由紀子
札幌市	石原　眞知子
〃	岡澤　知子
〃	水上　昌紀
石狩市	新行内　千壽子
倶知安町	中谷　収子

2月

札幌市	五十嵐　仍子
〃	成田　幸子
〃	鈴木　千枝子
〃	田村　須眞子
〃	金内　信子
〃	圦本　亜津子
〃	舘　珠美
〃	伊藤　安子
〃	秋谷　恵子
東京都	安田　和正
〃	安田　文子
〃	平野　京子
室蘭市	高橋　清子
北広島市	内田　富治

社団法人 北海道美術館協力会

アルテピア30周年！

おかげさまで北海道美術館協力会（アルテピア）は、今年創立30周年を迎えます。

今後も美術への架け橋として、
会員の皆さんにたくさんの情報をお届けします。
只今、アニバーサリーイヤーにふさわしいイベントを企画中！
ご期待下さい。

会員証更新のお手続きはお済みですか？
美術館1階売店でも会員証をお渡しできます。
美術展観覧の際は、お気軽にお立ち寄りください。

情報満載・アルテピアのホームページ
http://www.artepia.or.jp

道立近代美術館新商品紹介

片岡球子 絵はがき

「羊蹄山の秋色」1986年

「炬燵」1935年

「学ぶ子等」1933年

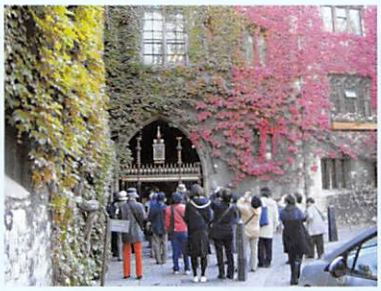
佐藤忠良記念子どもアトリエ オープンのお知らせ

昨年秋、佐藤忠良記念子どもアトリエが誕生しました。
札幌芸術の森野外美術館の一角にたつアトリエには、子どもや家族をモチーフにした佐藤忠良のブロンズ彫刻・素描が展示されています。
また、来館者が土や粘土などで作品をつくるプログラムも用意されています。
外からもかわいいブロンズ像が見られる明るい空間で、見ること作ることをお楽しみ下さい。

第27回海外美術研修

2008.10.2～10.9

大英博物館 & コッツウオルズの村々を訪ねて



蔦が美しい
ウェストミンスター寺院

あこがれの
大英博物館

バッキンガム宮殿
衛兵の交代

編集だより

- 今年、アルテピアは創立30周年を迎えました。会報「アルテピア」もB5判白黒ページの発刊号から数えて今回で第54号、前号からはA4判オールカラーでお届けするようになり、時の重みを感じます。
- 表紙を飾った『ルーブル百貨店―1897新春大売出し』ジュール・シェレ（北海道立帯広美術館蔵）は春らしく賑わいのあるポスター芸術です。各美術館からのインフォメーションや展覧企画とあわせてお楽しみいただければと思います。
- 30周年を迎え、会報「アルテピア」発行にあたっては、気持改めて作業は「初心忘れず」、心は「未来に向けて」、今後とも様々な情報を会員の皆さんにお伝えしてまいります。どうぞよろしく！　(M)

ひとくちメモ

「セザンヌの青春時代のこと」

ポール・セザンヌ（1839―1906）フランスの画家。
セザンヌの高校時代（10代）は、1852年（13歳）にブルボン高校に半寄宿生として入学。この学校は厳格なカトリック的古典教育を誇り、セザンヌの深い古典的教養と豊かな想像力、繊細な感受性の資質はこの時期に形成されたのだろう。いわゆる文学青年に育ち、この学校でエミール・ゾラ、ガイユなどと親交を深め、田野を歩き、狩猟に興じ、水浴し、ユゴー、ミュッセ、ホフマンらの文学を語り合っていたという。後の“水浴図”はこのときの体験をモチーフとしたとも。一方で、詩作に熱中し、また音楽特にワグナーに心酔したといいます。後に描いた妹をピアノに向かわせた絵は、「タンホイザー序曲」と名を付しています。